



風の十二方位 / The Wind's Twelve Quarters (1975) / アーシュラ・K・ル・グイン (小尾 美佐他訳) / 早川書房 (文庫・7/31刊・¥540)

良きにつけ悪しきにつけ、ル・グインの特質が溢れる作品集である。

エンバシーを持つ登場人物が、意識のある森と融合していく物語「帝国よりも大きくゆるやかに」、九人一組のクローンのうち、ただ一人が事故で生き残る「九つのいのち」、そして、ヒューゴー賞受賞作「オメラスから歩み去る人々」や、『闇の左手』『ゲド戦記』『所有せざる人々』の原形やエピソード等々ル・グイン中・短編SFの集大成といえる。

ル・グインの欠点は、小説としての結構を崩してまで、自己主張を通そうとすること、そう誰かがどこかで言っていた。たしかに、ル・グインの人間観、小説観には、一つの枠がある。その、ある意味で楽観的な枠は、人によってウサン臭く映るのだろう。しかし、ル・グイン流の信念は、やはりそれなりの説得力を(情熱を)持っている。今では、こんな作家は少ない。ハインラインより現代的で、矛盾の少ないル・グインに人気の集まるのも、当然だと思われる。だから——でもないが、本書を読んで反発を感じた方には、ル・グインはお勧めできない。それだけ、エッセンスの込められた、優れた作品集なのだ。(俊)